

小説国際プラント・ビジネス戦争（一）

杉田望

残された机上のメモ

いつもだったら陰惨な梅雨の季節だというのに今年は空梅雨に終わりそうな気配だった。木内信夫は読みかけの朝刊を食卓の上に放り出し、朝のニュースを伝えるテレビ画面に視線を移した。アウンサーは、今年は渇水の恐れがあり、大都市では水不足が深刻化している、と生真面目な調子で原稿を読み上げているところだった。

「今日も一日暑い日となりそうだ」

木内は一人つぶやき、冷めかけた渋谷のコーヒーを一気に飲み干した。ワンルームマンションで一人暮らしを始めてから早くも三年近くになる。千葉の近郊に土地付き住宅をようやく確保したのだが、商売柄、夜が遅いので車代も馬鹿にならない。それに五歳になる長男の陽一は虚弱体質ときている。金曜には必ず帰宅することを、唯一の条件に、別居生活を最初に言い出したのは、妻の早知子だった。

マンションは高層ビルがそびえ立つ西新宿からはそう遠くない位置にあった。木内が勤める関西商事まで地下鉄・丸ノ内線を利用すれば、三十分程度の距離である。

通勤には便利だ。木内は手帳を広げ、今日のスケジュールを確認すると勢いよくドアを閉め、マンションのエレベータ・ホールに向かって歩き出した。朝の日差しがホールに射し込んでいて、大きく息を吸い込んでエレベータに乗った。

木内は関西商事鋼管輸出部の中南米課長である。中堅幹部の一人だった。出社は早い。それが入社以来の習慣になっている。木内が自分の席に着いたのは、八時半を少し回ったところだった。引き締まった表情はいつもと変わらない。社内



はまだひっそりとして人影は少なかった。木内の机には、同じ課の加納元子が残した一通のメモがあった。繊細な字で、

日管製鉄の角田様まで連絡をして下さい。至急相談したいことがあるとのことでした。加納。

受発注をすべてコンピュータで管理している日管製鉄にしては、担当者がわざわざ電話で連絡してくることは珍しい。ともかく、急ぎの用件らしい。早過ぎはしないかと思ったが、木内は素早くダイヤルボタンを押し、角田を呼び出した。意外にも角田は入社していた。

「関西商事の木内です。いつもお世話になっております。電話を頂いたそうですが……留守にしております。申し訳ありませんでした」

日管製鉄の角田とは、木内が鋼管輸出部に配属されて以来の付き合いだからすでに五、六年になる。が、そこはメーカーと商社の間柄だけに、互いに親しいとはいっても限度がある。木内の口の利き方はあくまで丁重だ。電話口の向こうから角田の間延びした声に戻ってきた。

「実はメキシコ向けに鋼管輸出の話が突然舞い込んできましたね、この話はうちの上の方から出ている話で、私としても十分な情報を持っていないのですよ。日管製鉄としてはお宅を通じて相手と交渉したい、そんなように考えているのですが、どうでしょう」

「ありがとうございます。それは結構ですが、今どきメキシコとは珍しいですね。客先はどちらで……それに用途はどんな分野でしょうか」

「いや、実を言うとそのあたりがはっきりしていません。木内さんはパテックというメキシコの会社をご存知ですか、後ほどファックスで概要を送りますが、そこがカウンターパートになります。とりあえずオタクの方でファイナンスの問題を含めて検討を頂きたい。それからこの話はできるだけ内密な形で進めてもらいたいのですが、その点を配慮して下さい。急いでいるわけではありませんが、よろしく検討をお願いします」

そう言って、角田の電話は切れた。相手の会社はパテック社とか言った。木内には聞き覚えのない会社である。それはそれとして角田の話では、かなり大きな

契約規模となりそう。対象はシームレスパイプで、メキシコ向け商談としては最近にはない大型案件だった。

これほど大量のパイプのオフアールはかつてなかった。電話を終えた木内の表情は興奮に包まれた。が、いかにも漠然とした話でもある。それに問題の多いメキシコのことである。

話は内密に進めて欲しいと言った、角田の何かいわくありげなもの言い方も、ひっかかる。何だか日管製鉄はリスクを関西商事に押しつけ、逃げを打っているような気がしないでもない。どういうことが、木内の頭の中には幾つかの疑問が湧き上がった。

木内は、考えることよりも、行動が先になるタイプの人である。突かれたように受話器を取り上げた。どうやらこの話には石油か、エネルギー問題が絡んでいる。今田に聞くのが一番早いかもしれない。木内はとっさに、そう判断して今田と話をしてみる気になった。

「今田課長はいますか。鋼管輸出部の木内です」

今田とは大学が同窓で、同期入社ということもあって、木内は今田を気の許せる奴だと思っている。かつて二人は家族ぐるみの付き合いをしていた。今田は席にいた。

「木内か、いやに早いじゃないか、そのうちやろうとは思っていたんだ」

今田総吉はエネルギー機械本部の中堅課長だった。担当は石油開発運搬機器だったが、エネルギー問題全般に関し、社内でも有数の情報通として知られていた。入社二十年。今がまさしく働き盛りである。着実に実績を上げ、同期の中でめきと頭角を現している男だった。

「ちょっと、教えてもらいたいことがあるんだが、少し時間をくれないか」

「難しい話か。十時からミーティングが始まるので、三十分位だったら大丈夫だ。そうだなあ地下の喫茶店、ロータスで会うことにするか」

木内が今田との電話を終えた時、覚えのある香水の香りが漂ってきた。ふと見ると、木内の席の並びの端に、加納元子が席に着こうとしていた。元子は女子大を出て、関西商事に入社してからちょうど二年目になる。会社があつらえた紺色の制服の胸元には、刺繍で縁取りされたブラウスが覗いていた。木内と視線が会うと、新聞を整理する手を休めて、わずかに微笑みかけた。

「おはよう加納君。エネルギー機器部の今田課長と下のロータスで会ってくるので、何かあったら連絡をくれないか」

木内はそう言い残すと、急ぎ足で部屋を出ていった。

運ばれたコーヒーを飲みかけた時、今田の姿が現れた。今田は喫茶店の中をひとまわり見渡してから、木内の姿を認め、近寄ってきた。木内は先ほど日管製鉄からファックスで送られたメモを、背広の内ポケットから引き出し、それを手にして今田に合図を送った。

「もう間もなく七月か、今年は空梅雨に終わりそうだ。暑くてかなわん」

二人は東京本社に勤めているとは言っても、そうたびたび会っているわけではない。今田は懐かしげに声をかけ、木内の前の席に腰を下ろした。今田はコーヒーを注文した。木内は頷きながら、手にしているメモを今田に渡した。今田はさつとメモに目を通してから言った。

「メキシコ向けに鋼管輸出か、かなりの量だね。これほど大量のパイプを必要とするプロジェクトだと、石油開発以外には考えられないが、メキシコに新しい油田が発見されたとは、聞いていないがね」

「そうなんだ。これを見たまえ」

木内はメモを手元に引き寄せた。木内が示したメモには、石油掘削用のケーシングパイプや明らかに石油輸送用と思われるが大口径の鋼管も含まれている。この仕様で見ると限りでは、やはり用途は石油開発以外には考えられない。

「奇妙だね。だいたい、あそこは米系メジャーさえも愛想をつかし、引き揚げていることは君も知っているだろう。石油か天然ガスかは知らないが、石油埋蔵に關して言えば、評価は低いはずだが……」

実際、今田の言う通りだ。確かにメキシコは一時、石油ブームに沸いたことがある。サウジアラビア並みの石油埋蔵があるのではないかと騒がれたこともあった。が、米系メジャーが、内陸部やメキシコ沿岸などいたるところを掘り返したが、せいぜい中小規模の油田を発見したのに止まり、過大な期待は打ち破られた。それにナシヨナリズムの台頭で、急激に開発条件は悪化し、一時のブームも嘘のように沈静していた。その辺の事情はさすがに木内も知っていた。

「だが、石油プロジェクトでないとすれば、一体これほど大量のパイプを何に使おうというのだろう。奇妙な話ではないか」

今田は忙しく頭を回転させていた。もう一度、ファックスのメモを丹念に読み返しながら、幾度も頭を振った。しばらく間をおいて、改まった口調で言った。「それにしても話が大きいなあ。一応調べてみる価値はあるんじゃないかね。俺の方でも調査するが、もしかしたらとんでもないビッグ・プロジェクトに発展することもある。石油の話だとしたら桁外れにおもしろい仕事になるような気がする」

その言い方を聞いて、木内はいかにも今田らしいと思った。たいていこういった話の場合、普通は悲観材料を並べたて、慎重にやるべきだというのが、この会社の社風になっている。とくに十五年ほど前のことになるが、グランドマン航空機事件が発覚したのを契機に社内勢力図が大きく変わり、総務畑出身の山田新造しんぞうが社長に就任してからというもの、その傾向が一段と強まったと、木内は思っている。

ところが今田はそういう社内動向には無頓着のようだった。いつぞや中東に天然ガスを利用した連鑄プラントを建設する話が舞い込んできた時も、社内の慎重論を抑え込んで、見事にプロジェクトをまとめあげた。強気を信条とする男だった。今のところ今田のこの強気の路線は、成功をおさめていた。

二人の話が一段落した時、喫茶店は朝食を抜いて出勤した若い社員たちで混雑し始めていた。すでに十時だった。そろそろ会議が始まる時刻になっていた。時計を覗きこんだ今田は、

「この件はまた後で相談しよう」、そういうなり伝票を挿んで立ち上がった。

午前の会議を終えて席に戻った今田総古は、ロータスで木内信夫から聞かされた話が妙に気になって仕方がなかった。あのメモにあった発注仕様から見る限り、明らかに石油か天然ガスか、エネルギー関連資材以外に考えられない、今田にはそう思えた。

入社以来、機械部門の中にあつて、エネルギー機器を一貫して担当してきた経験から、ことエネルギー問題については相当な自信があつた。実際社内だけでなく、世間的にもエネルギー問題では関西商事に今田ありという高い評価を受けていた。

が、今田が知る限り、メキシコでこれだけ大量に石油開発資材を必要とするプロジェクトは存在しない。それは自信を持って言えた。だいたい、メキシコでの

石油開発はメジャーさえも放棄したはずだ。だから地下の喫茶店では木内に対し、もう一つ積極的にはなれず、中途半端な言い方しかできなかったのである。

今田はあの時のことを鮮明に思い起こすことができる。五年前のことだ。日本も石油開発公社が中心となり、ナショナル・プロジェクトとしてメキシコでの石油開発に取り組むため、大がかりな国策会社が設立された。一種のブームに乗った計画だった。

が、提携していた米系メジャー、エプソンズ社が突然、撤退を声明した。撤退理由はいと簡単なものだった。メキシコの資源政策があまりにも外資にとって条件が厳しくなったので、これ以上、投資を継続することは困難で、各パートナーに撤退に協力して欲しいと突然に言い出したのだ。

この計画には、すでにかんりの資金を投入していたので、日本の関係企業間で撤退をめぐって激しい議論が起こった。関西商事は、社長の山田新造がコンソーシアムの代表委員として出席していたのだが、特別、発言も求めず、あっさりとして撤退に同意してしまった。

今田はその時、米系メジャーの撤退の仕方に関か不自然なものを感じたのだが、発言する立場にはなく、その機会を与えられるはずもなかったため、結局のところ沈黙を守らざるを得なかった。

エプソンズが撤退を決めたのに続いて、メキシコに進出していた各コンソーシアムも相次いで撤退した。その結果、メキシコでの石油開発は火が消えたような状態になった。これは、今田にとっては間接的な関わり方だったけれど、苦い経験になった。今田はその時のことを思い出し、軽く舌打ちし、手にしたボールペンを机の上に放り投げた。

昼休みになり、社内はざわついていて、時計を見ると、十二時を少し回ったところだった。前の席に坐る長谷川が今田を昼食にでも誘いたいような素振りそぶりをみせたが、今田の表情があまりにも硬かったので、他の同僚を誘いそそくさと出ていった。

今田がこの話を奇妙だと思うのは、日管製鉄が持ち込んできたからだだった。日管製鉄ともあろうメジャーな企業が、何の根拠もなく動き出すはずがない。しかもだ、木内は日管製鉄のかなり上の方が動いていると聞いたと言う。何かある、おもしろそうな話である。

そう考えて今田は妙な興奮に駆られるのを覚えた。次第に気分が高揚してきているのが自分でもわかる。木内を昼食に誘うことを思い立ち電話を入れてたが、木内はあいにく席を空けていた。電話に出たのは加納元子だった。木内が席に戻るのには午後になるのではないかという快活な声が返ってきた。

「なかなか美人だね、彼女。飲み連れ出すわけにはいかないか」

「馬鹿を言え、あの娘はそういうんじゃないんだ」

だいぶ前のことになる、今田は冗談のつもりだった。ところが木内は真剣な表情でそう言った。そんなやりとりがあったことが、強い印象として残っていた。今田はあの時のことを思い出し思わず苦笑した。木内がいらないのでは仕方がない。受話器を置いた今田は端正な顔を歪めるように、しばし考え込んだ。

「副社長の大園おおそのならば何か情報を持っているかもしれない」

見ると、副社長が在席していることを示すランプが点いていた。今田は大園副社長に会ってみようと思った。そう思い立った途端に、今田は机をバチンと叩き席を立っていた。

関西商事の副社長室は機械本部が占める五階の奥まったところにあった。今田の席とは同じフロアだった。今田は急ぎ足で副社長室に向かった。昼休みの時間のためか、部屋の入口には秘書の姿はなかった。

今田は軽く大園の部屋をノックしたが、返事がない。今田はかまわずドアを押し開いた。ちょうど、大園はドアを背にして盛んにコンピュータのキイを叩いているところだった。人の気配を感じた様子だが、キイを叩く手は少しも速度は落ちなかった。大園はその姿勢を崩さずに言った。

「それは鋼管輸出部に舞い込んだ話だな。日管製鉄はどうやら前面に出ることは避ける方針のようだが、五千万トンものパイプ商談としては課長レベルで対応しようとしている。何か臭う感じだが、君の判断はどうだ」

用件を確かめずもせず、いきなり言った。大園はそう言い終わるとクルリと回転時子を正面に向けた。今田は一瞬息を呑んだ。木内からこの話を聞いたのはつい今しがたのことだ。一体どこで情報を仕入れたというのか。

大園にはそういうやり方で人の意表を突いて楽しむところがあることは十分知っているつもりだったが、まさしく意表を突かれた格好になった。大園はいたって上機嫌の様子だ。

鬢びんに少し白いものが混じってはいるが、大園の顔立ちは精悍そのものだ。ニューヨーク駐在が長く、これまで主として機械畑を歩いてきた。四十三歳にして取締役、四十八歳にして副社長のポストを獲得した男である。この関西商事の創設者である三島家とは縁戚関係にあるとも言われているが、それだけではあるまい。これまでの大園の行動から見て実力でのし上がってきたと見るのが妥当だろう。

大園は大変に精力的な男で、凄い行動力を持っていた。それにめっぽう人使いが荒い。言いたいことを誰に対してもずけずけ言う。それだけに敵も多く、とくに社長の山田新造とは微妙な関係にあった。今田とは社歴で言えば、たかだか十数年の開きだが、とてもかなわないと時々思うことがある。

「すでにご存知でしたか」

「ああ。で、問題となる点は……」

「発注仕様から判断すると、どうもエネルギー関連資材のように思えるのですが、私の知っている限りではメキシコにこれほど大量の資機材を必要とするプロジェクトは考えられない。一体、こんなに大量の鋼管を何に使うのか、さっぱり見当が付かないのです」

大園はダブルのジャケットを上手に着こなしている。袖口にはメノウを散りばめたカフスがキラリと光っていた。大園は今田の話を黙って聞いていた。机の引き出しからパイプを出し、深々と吸い込んだ。紫煙がふわりと揺らいだ。今田は映画のワンシーンを思い出させるような絵になる図だと思った。

「ところで、カウンターパートに指名されているパテック社の社長、レピカという男のことだが、確か彼はメヒペトロの総裁を務めていたことがあったはずだ。その後、カルロス政権の下で経済顧問などを歴任したが、カルロス大統領が引退したのにもなつて、彼も政治の世界から姿を消した。レピカはカルロスの信任が極めて厚いと聞いているが、その男が今度はパテック社の社長として再登場したというわけだ」

大園は交渉相手となるはずのレピカの経歴まで調べ上げていた。あのメモにあったレピカという男は、今田も聞き覚えのある名前だと思っただが、うかつにも明確には覚えていなかった。なるほど、メヒペトロの総裁を務めた人物だったのか。

その時、大園の視線が入口のドアの方向にちらりと走った。背中に人の気配を感じて振り向くと、いつの間にかそこには木内信夫の姿があった。木内は今田に

頷くように笑いかけた。だいぶ急いで駆け付けてきたとみえ、木内には呼吸の乱れがあった。

「まあ、二人ともいつまでも立っていないで、そこに座ったらどうだ」

大園は二人に席を勧めながら、そこで一呼吸をおいて話を続けた。それは考えながら話をするふうだった。決して勿体ぶっているわけではないが、大園がつくる表情はいかにも思慮深そうにみえる。

「レピカが前面に出ているとすれば、背後に控えているのは多分、カルロスということになる。しかもだ。話は内密に進めたいと言っていることから見て、メキシコの政争絡みの案件とも考えられるが、どうだろう。メキシコの現状に関してだが、木内君の判断を聞きたい」

しばらく考え込み、木内はようやく口をひらいた。さすがに木内は鋼管輸出で中南米を担当してから六年近くの経験を持っているだけに、メキシコの現状を定みなく分析してみせた。が、今田が聞く限り、木内の話にはとくに目新しい情報は含まれていなかった。大園と言えば、時々諾きながら熱心に木内の話に関きいていた。大園の手元では、紫色のパイプの煙が揺らいでいる。

木内の話が一段落した時、大園は「なるほど」と言っつて、二人に一つのデータを示した。二人は思わず顔を見合わせた。それは先ほど大園が叩いていたコンピュータから吐き出されたハードコピーだった。そこには原油価格が激しく変動している様子が時系列でグラフで示されていた。

「このデータで読む限りでは、原油価格は昨年の十二月から一貫して、上昇を続けている。一時はバレル当り十五ドルの水準まで落ち込んだものが、昨年末には二十ドルの水準に回復、さらに上昇気運にある。今、原油価格が強気含みで走り始めた理由は何であるか、だ」

原油価格が上昇していることは今田も知っていた。原油価格はそれ自体が一種の市況商品としての性格を帯び、投機の対象になっていた。

今田は大園の疑問に答える形で、そういう意味のことを言った。木内も今田の意見に賛成の様子で大きく頷いた。でも何故、原油価格の話なんぞするのか。メキシコ向けのパイプ商談とどういう関係があるというのか。大園の話の脈絡に疑問を感じたが、大園は再びコンピュータから吐き出されたデータを二人に示しながら続けた。

「だが、データをよく見たまえ。いいか、上昇傾向が明確になったのは昨年末からだ。なぜ昨年末がクロスポイントになったか、僕はこれに人為的な意図を感じているんだ」

ある意図で原油価格が動かされているとすれば、それはメジャーの介在以外に考えられない。つまり、大園が言うことが正しいとすれば、メジャーが意識的に原油価格を操作しているということだ。いかにも大園らしい突飛な発想である。今田は思った。が、それにしてもかつてはいざ知らず、現在のメジャーはそんな力をすでに失っているのではないか、そう疑問を挟んだのは木内の方だった。

「そう、その通りなのだが、原油の供給過剰という現実がある一方で、原油価格が上昇を続けているという矛盾、これが今回のパイプ輸出の話と関連があるかどうか、それが問題だと思う。このことは君たちの頭の中に入れておいてくれたまえ。さて、そのことはひとまず置くとして、次ぎに検討しておきたいのが、メキシコ経済の現状に関してだが……」

そう言って、大園は再びコンピュータに向かってキーボードを叩いた。大園の専用コンピュータは小型だが、ターミナルだけで記憶処理能力は有に二百メガバイトはある。しかも大型機と接続が可能で、その通信機能を駆使して瞬時にしてあらゆるデータをディスプレイ上に呼び出すことができた。大園の指先は器用にキーボードの上を踊った。ディスプレイ上に表れた折線グラフを指さしながら大園は、二人に向かって言った。

「メキシコの対外債務はこの通り二千一億ドル近くに達している。外貨繰りが極端に悪化し始めたのはちょうど八五年からだ。現時点では利子の支払いだけでも実に年間百二十億ドル。このことは木内君がすでに触れたことだが、社会不安を引き起こす要因の一つだ」

今田は来月中旬からニューヨークで、メキシコ債権国会議が開かれることを思い出した。新聞は荒れ模様の会議になるのではないかと悲観的な論調でこのニュースを伝えていた。何しろ二十パーセントを越せば危機というデット・サーピス・レシオ（輸出額に対する対外債務支払額の割合）が八十五パーセントを遙かに超えているのだ。たとえ債権国会議で利子補給問題に限定して話を進めたとしても、各国の足並みが揃うかどうか、疑問とされるところだ。

「とくに米銀の動きがふだんとはだいぶ違うように思います。シティ・バンクに

しるバンカメ（バンクオブアメリカ）にしる積極的に動くつもりがまるでない。そこにきて世界銀行、IMFも救済には消極的だ。このままではメキシコはデフォルト（債務不履行）に追い込まれる可能性すらあります」

木内は的確にメキシコの現状を説明した。メキシコの外貨繰りが悪化した直接の原因はやはり原油輸出の停滞にあった。八三年の生産高は二百五十万ハレル、それがわずか三、四年の間に百五十万バレルを切ってしまった。これでは輸出余力を失うのは当然だ。それに国際市場は供給過剰ときている。このため、メキシコ原油の国際市場におけるシェアはみるみる間に落ち込んでしまった。

メジャーの撤退があまりにもドラスティックだったため、新規油田の開発動向にのみ目を奪われていたが、実際の打撃はむしろ既存油田の方が大きかったのだ、と今田は木内の話を聞きながら思った。事実上、既存油田に対する投資が放棄されていたのである。

「債権国会議との絡みで言うと、アメリカはリスケ（リスケジュール）に応ずるところかメキシコをデフォルトに追い込むような対応でした。昨年十二月の会議では日本に債権の肩代りを強く要請してきましたね。自分は逃げを打ち、債権は日本に押しつける、アメリカの基本的なスタンスはそういうものではなかったでしょうが」

木内は自分が喋っていることにくらか興奮している様子だった。日本の銀行団も米国の思いもよらぬ対応に終始振り回された当時のことを木内は思い出したらようで、なかばアメリカを非難するような口調で言った。自分が担当する国なり地域にはいつの間にか心情的なものが湧いてくるものだ、と誰かが言ったことがある。木内の気持もそれに近いものではなからうかと今田は思った。

「アメリカによる金融封鎖か」

大園はつぶやくように言った。金融封鎖という言い方は多少誇張があるにしても、アメリカの対メキシコ政策はそれに近いものだった。メキシコは石油で締めあげられ、今度は金融でいたぶられている。ともかく米国の姿勢は強硬だった。困ったことに、日本政府も米国に追随する対メキシコ政策を採っていた。石油開発から手を引いたのも、実を言うとアメリカに追従したまでのことで、特別に理由があつてのことではない。その結果、メキシコ向けの輸出保険は運用面での規制が強化され、事実上、保険業務は停止されたに近い状態にあつた。

今田がそのことに触れようとした時、大園が黄色いクラフト紙の大型封筒を取り出し、そのメモの中から書類の束を抜き出して、二人の前においた。一部は英字新聞のスクラップのコピーで、厚手の模造紙に一枚一枚丁寧に貼ってあった。一部は横書の日本語だった。多分、それは大園が書き込んだメモであろう。

「見たまえ。この記事なんだが、不思議だとは思わんかね」英字新聞の一枚のスクラップを引き抜き、二人の前に示しながら言った。手にしたスクラップには
八七年二月二十七日　とゴム印が押してあった。メキシコ発のロイヤル特電のこの記事は、いわゆるベタ記事の扱いだった。

『メキシコ沿岸でソ連原潜が事故』

と見出しにはあった。事故を起こしたソ連原潜はヒトカップ湾（エトロフ島）を出港、太平洋を米国沿岸に航行、メキシコ沿岸で何らかの作戦行動中にトラブルに巻き込まれ、海底で事故を起こした模様。メキシコ政府はソ連原潜の領海侵犯をソ連政府に強く抗議、一方、メキシコ海軍は同海域の封鎖を行った、と書いてあった。

これはどのニュースがベタ記事の扱いとは。定かではないが、日本の新聞には載っていないかったように思える。大園が「不思議だ」と言ったのは、多分そのことだろう、と今田は思った。確かに不思議な事件だ。二人は息を呑んで大園の次の言葉を待った。

「ソ連の原潜が事故を起こした場所はバハカリフォルニア半島の突端、サンルカス岬からおよそ百キロの地点だ。僕も後で気が付いたのだが、この場所はつい数年前までエブソンズとかモルビスとかメジャーの連中が盛んにボウリングをやっていたところだね。そこから西北に四十キロ上がったところに、日本の石油開発公社が利権を持っていた鉱区があった」

ソ連原潜の事故を伝えた記事は後にも先にもこれが最初で、最後だったと大園は付け加えた。木内と今田は思わず互いの顔を見合わせた。今が六月下旬だから四カ月ほど前のことになる。これらのことを今回のパイプ商談と関係付けることが可能かどうかだ。これまで話してきたことと関係があると言えば言えないこともないが、まったく無関係のようにも思えた。

それに、全体の脈絡を考える場合、原潜事故はどんな意味を待つのか。いかにも突飛な話である。が、気になることと言えば、原潜事故の場所だった。今田は

ちよつと考え込んだ。木内も同じ思いのようだった。大園は相変わらず上機嫌で快活に話を続けて言った。

「メキシコでの石油開発の可能性はメジャーによって完全に否定されていることは事実だ。その結果、石油の輸出に依存していた外貨収入は急速に落ち込み、デフォルト寸前まで追い込まれたということだね。さらにだ、政情不安が顕在化、体制内部では政争が激化している。そのメキシコで大量のパイプ輸入をしたいという。仕様から判断すると、このパイプは今田君の言う通り石油開発向けの資材のように思われる。そして、かつて石油開発が行われた場所で、ソ連原潜が事故を起こしたが、なぜか大きくは報道されずに終わっている。これは何かあると考えるのが自然ではないか」

「といって大園は言葉を切った。そして、しばらく考え込むふりをした。木内と今田は緊張して、大園の次の言葉を待った。が、口を開くのにそう時間はかからなかった。

「無関係のように思える一つ一つの情報が、相互に結び付くかどうかを検討することが、この仕事の出発点になるはずだ。だが、ここに坐っているんじゃないかな」

「と、言いますと……？」

木内が聞き返した。大園は二人を交互に見比べながら言った。

「とりあえずパテック社と連絡をとることが必要だが、メキシコに飛べば何かわかるかもしれない。どうだろうね。それを調べるために君たち二人は今日中にもメキシコに飛んでくれないか。まだ、組織的に対応するためには、あまりにも話が漠然としているので、僕の特命ということで動いてくれないか」

一応は相談の形をとっているが、大園のいい方は断固とした命令と木内は受け取った。これもまた、突飛な命令である。木内はふと、明日は土曜日、久々に自宅に帰ることを予定していたことを思い出した。

「が、木内は仕方があるまいと思った。今田と視線が合うと、軽く頷き返した。決して不満そうな顔ではなかった。入園は二人の顔を見比べながら、満足そうな笑みを浮かべた。

「ところで副社長、一つだけ聞いておきたいことがあります。パイプの話はどこで聞かれたのですか」

そう聞いたのは今田だった。

「なあに簡単なことさ、昨夜、日管製鉄の唐沢専務が電話をよこしてね。それに参考のために言っておくが、この話は鎌谷日経連会長にメキシコで大学教授を務める小川とかいう人物が待ち込んだんだそうさ。一応、小川明夫なる人物を調べてみたのだが、財界にも相当食い込み、鎌谷会長の信用も厚いと聞いている」

大園は今田の質問にごくあっさりと答えた。

「そういうことだ。これから常務会が始まるので後は頼んだよ。帰国報告を楽しみにしている」

と言いつつ、大園は言を立ち、急ぎ足で部屋を出て行った。だいたい大園の話はこういう形で終わることが多い。残された者が難題を抱え込むことになるのだが、それを不満に感じさせないところが大園の人徳というものなのだろう、と今田は思った。

二人は大園の後に続いて副社長室をでた。二人の足どりは軽やかだった。副社長室には、大園が残したパイプの煙が淡く円を描きながら揺らいでいた。

(つづく)

小説国際プラント・ビジネス戦争(二)

メキシコ・シテイ

杉田望

白く乾いたメキシコ・シテイの街並みが広がってきた。エアロメヒコはゆっくりと旋回しながら、機首をベント・ファレス空港に向け、着陸態勢に入った。機体が高度を落とすたびに緊張感が広がる。機内に真つ赤な夕日が差し込んでいる。

成田から十八時間の長旅であった。

今田は数えきれないほど、海外出張の経験を持っている。それにしても、幾度経験しても着陸瞬間の嫌な緊張感から解放されたことがない。今田は汗ばんだ手を思わず固く握り締めた。木内きうちといえばロスでエアロメヒコに乗り換えてから機内食もとらずに睡眠をむさぼっていた。スチュワーデスがシートベルトの着用を乗客にアナウンスしている。機体が大きく揺れた。

「もうメキシコ・シテイか、よく寝かせてもらった」

木内は軽い伸びをしながらそういった。ロスで二時間ほど待たされたのを除けばまずは順調な旅だった。それでもけだるい疲労感が体いっぱい堆積した感じだった。それにしても急な出張である。大園おおの副社長が「メキシコ・シテイに飛べ」といった、その二日後に今田と木内の二人は機上の人となっていた。ほとんどなんの準備もできなかった。

「いつもそつなのだから………因果な商売だ」

今田は強引に出張を命じた、大園副社長の顔を思い浮かべながら、もう一度シートベルトを強く締め、メキシコの大地に目を落とした。大地が追っていた。

「君は秋野あきのを知っていたね、出発前にテレックスを入れておいたので、出迎えにきているはずだ」



木内がそついい終えたとき、鋭い金属音を響かせながら機体は地上を滑り始めた。窓の景色がもの凄いスピードで流れていく。乗客たちの安堵の溜息が漏れて、機内はたちまちざわめいた空気に包まれた。乗客の大半はアメリカへの出稼ぎ労働者であろうか。われ先にと争いながら出口に向かって立ち上がった。

さすがにベニト・ファレス空港はメキシコの表玄関だ。ターミナルビルは見事な大理石を敷き詰め、壁面は民族的色彩を存分に取り入れた壁画が独特の雰囲気をつくり出していた。入国手続きも比較的簡単だった。イミグレーションも愛想がよい。税関もほとんどフリーパスに近かった。

今田は空港ロビーの雑踏のなかに出迎えにきているはずの秋野の姿を探した。確か社内会議かなにかで、一度、顔を合わせたことがあるはずだ。それなのにどうも顔を思い起こすことができない。

「本社の今田課長ですね、ご苦労さまでした」

雑踏のなかから今田にそう呼びかけてきたのが秋野だった。背の高い、快活そうな青年だ。昭和五十年入社、出身はエネルギー事業本部、メキシコ駐在は今年で五年になる。そう木内から聞いたのを思い出した。

「日曜日だというのにすまんね」

遅れて出てきた木内は、そういつて秋野の手をしっかりと握った。木内は、秋野とは仕事の上でも緊密な連絡があるらしい。二人は軽い冗談を応酬しながら再会を喜びあっている。

「いつもはひどく混雑するのですが、今日は日曜日ですからシティまで三十分というところでしょうか。今田さんはメキシコ・シティは初めてですか」

「ニューヨークに駐在していた時代、休暇で旅行したことはありますが、仕事ではこれが最初です。よろしく頼みます」

今田は誰に対してもそうだが、十年も入社に開きがある年下のものに対する口のきき方にしては丁重だった。秋野は良く日焼けした顔に白い歯を覗かせて、

「おまかせ下さい。ことに夜の部でしたら」と、冗談ほく応えた。

豊かな太陽とほどよい降雨の恩恵を受けて、強烈な色彩の花ばなが己の容姿を競い合うかのように咲き乱れ、空港ビルの広場を飾りたてている。政情不安が伝えられているわりには、意外にも落ち着いた雰囲気があった。秋野がハンドルを

握るセダンは、一路シティに向けスピードをあげた。

「今回は何日ぐらいの予定ですか」

木内が打ったテレックスには出張目的には触れていなかった。こうしたことはよくあるケースである。が、アテンドを引き受ける側としては、日程がどういうようになっているか、当たり前のことだが気になる。

「秋野君、実をいうと今回の出張は雲をつかむような仕事でね、どうアクションを起こしたらよいか、まだ考えていないんだ」

苦笑いを浮かべ木内はそう答えた。実際、それが正直なところである。二人はほとんど何の準備もないままに、メキシコに飛んできた。唯一の手掛かりといえればパテック社の住所と電話番号だけだった。大雑把なものだ。

「そうすると、今回は副社長の特命事項ということですか」

秋野は無邪気ない方でさらりといった。この二人の奇妙な組み合わせを自然に感じたとしても不思議ではない。だいたい、二人の担当する部門はまるで追っている。よほどのことがない限り、こうした組み合わせで出張することは考えられないことである。言葉の端には そんな無茶な仕事を押し付けるのは、たぶん大園副社長以外にはいない という含みがあった。

「詳しくは食事をしながら、後で秋野君にもじっくり相談したい」

木内は秋野の質問を遮るようにそういった。余計な詮索はするな、という響きがあった。三人の間に一瞬、気まずい雰囲気があった。秋野はその意味するところを悟ったようだった。さすが商社マンとして鍛えられてきただけのことはある。さらりと話題を変えた。

「ところで、ご当地の夜のことですが、どんな趣向をお望みですか」

「そうだな、秋野君にまかせよう」

角の立たないいい方で木内が答えた。それを機に木内と秋野の間にたわいない冗談が交わされた。屈託のない笑いが起こった。高速道路から見え隠れする民家のベランダにはブーゲンビリアが覆うように咲き誇り、また、別の家のベランダには原色の花びらを持つコスモスがそよぎ、鮮やかなサボテンの花が夕日に映えている。それがスペイン風の白壁の家と実に見事なコントラストを描き旅人の心を和ませる。原色が似合う街だと今田は思った。

「そろそろこのあたりから市内に入ります。宿はフィエスタ・パラセを予約して

おきました。が、ホテルまではあと十五分ほどでしょうか」

三人を乗せたセダンはソロカに隣接する連邦区庁街を通り抜けたあたりで、幾分スピードを緩め、やがてレフォルマ通りに出て右に曲がった。フィエスタ・パラセは公園通りとして有名なレフォルマ大通りに面した超高層の近代的なホテルだ。セダンはホテルの正面玄関でピタリと停車した。コロンブス記念碑はちょうど、フィエスタ・パラセの真向かいにそびえ立っている。

「ブエナス ノーチエス セニョール」

真つ赤な制服を身に着けたメステイオが、満面笑みを浮かべてサツとドアを開いた。秋野がこのメステイオに何事か指示を与える大袈裟な身振りおおげさで頷き、車のキーを受け取り、駐車場に車を入れた。

「予約を入れてあるので、手続きを済ませて下さい。私はここで一応失礼しますが、一時間後に迎えにまいります」

レセプションと表示されたカウンターを指さしながら秋野はそういった。これからナイトクラブにでも出掛けるのであるうか。ロビーではアメリカからの観光団とおぼしき一群の老若男女が華はなやいだ様子で送迎バスを待っているところだった。急ぎ足でエレベーター・ホールに消えていくのは、いずれも今田たちと同様なビジネスマンであろうか。

宿泊カードにサインを終えた今田は、エレベーターに向かって歩き出した。木内が続いてエレベーターに乗った。ドアが閉まる瞬間、白人の大男が二人の間を割るように滑り込んできた。

「エクスキューズ ミー」

抑揚おさげは東部標準語に聞こえた。瞬間、今田はどこかで会ったような気がした。それは錯覚のようにも思えた。が、今田がこの男を注意深く観察していたら、たぶん飛行場から今田たちのセダンの後を一定の距離をおいてつけてきたことに気が付くはずだった。大男のアメリカ人は二人を探るような目で一瞥いちめくして、途中のフロアに消えていった。

エレベーターは十四階で止まった。二人は別べつの部屋に入った。豪華な絨毯じゅうたんを敷き詰めたアメリカンスタイルの部屋だった。今田が風呂の支度を始めたとき、軽いノックが聞こえた。木内の姿があった。

「少し相談しておきたいことがあるんだが、かまわないか」

「車のなかでの話の続きだろう。俺もそのことが気になっていたんだ。いつそのこと秋野君に事情を話し、仕事を手伝ってもらうことを考えていたのだが……君はどう思う」

関西商事メキシコ支店は、そんなに大きな所帯ではない。それだけに気を使わなければならぬのが、いつてみれば今田たちの立場だ。それにもう一つ厄介な問題は、メキシコ支店長の船橋策造は社長派色を丸出しにした派閥指向の強い男であるということだった。悪いことに大園と山田社長とは微妙な関係にある。木内はそうした意味のことをいった。

「そいつは俺たちとは関係のない世界の話だ。ただ、秋野君が板挟みの状態になっても困る。そこらあたりの配慮をしてやらないと」

と、今田がいった。

「奴さんは大丈夫だと思う」

秋野についての二人の相談は簡単にまとまった。それでは、といい残すと、木内は急いで部屋を出ていった。今田は勢いよく熱湯をバスに注ぎ込んだ。そしてゆったりと湯につかった。今田は久しぶりに大きな仕事ができる予感がした。バスタオルをしっかりと腰に巻きつけ、鏡のなかに写し出された自分の顔を思いっきり叩いてみた。四十代半ばの顔としては、まだ十分に張りのある面構えだった。それが今田には満足に思えた。

「歩いて十分ほどの距離です。夜のレフォルマ通りは見ごたえがあります。レストランまで歩いて行くことにしたいが、どうでしょう」

ロビーで待っていた秋野が、そういつて回転ドアの方向に歩きだした。二人は秋野に続いてホテルを出た。外は暑さで蒸せかえっていた。それでも日中の暑さに比べれば、まだましな方だと秋野は笑いながらいった。時刻はすでに午後九時を回っているというのに、人の往来はなお激しかった。街全体が埃っぽい喧騒に包まれている。

旅情を楽しませてくれるのは、レフォルマ通りの緑だった。確かこの通りは十九世紀の半ば、当時、メキシコの統治者であったスペインのマクシミリアン皇帝がパリのシャンゼリゼ通りを模倣してつくったものだ。今田はそんなことを何かで読んだことを思い出した。優雅なダイアナの噴水がスポットライトを受け、飛び散る水しぶきを小さな硝子玉が吹き上げるかのように映し出していた。

秋野が二人を案内したところは、レフォルマ通りを左に曲がったソナロッサ街の一角にある「フォコラーレ」というメキシカンスタイルのレストランだった。ソナロッサ街は東京でいえば、さしずめ原宿か六本木といった繁華街であろう。そこは意外に静かなレストランだった。中央にしつらえたステージでは五人編成のバンドがラテン音楽を奏でているところだった。豪華な雰囲気である。

「まず、酒ですね。せっかくですからメキシコの地酒でいきましょうか。サウサなんていうのはどうでしょう。テキーラの種類ですが、かなりの水準の酒だと思いますよ」

メニューに目を通しながら秋野はそういった。サウサという地酒はマゲイと呼ばれる竜舌蘭の一種からつくられる蒸溜酒で、アルコール濃度は優に六十度近くはあるうか。日本ではテキーラとして知られるこの酒は、グアダハラ郊外のテキーラという村で造られているのでこの名前がついた。強烈な酒だが、大気が乾燥している土地だけに、味も一段と冴える。秋野はサウサに関して、ひとくさり蘊蓄を傾けてみせた。

「わかった、わかった。でもなあ、やはり最初はビールにしたい」

ひょうきんに木内は手を振りながらそういった。秋野は側に立つボーイにメニューを示しながら、いくつかの料理を注文した。ボーイがテーブルを離れたあと、木内かメキシコ出張の目的をかいつまんで話した。

「そうですね、僕にできることでしたらいくらでもお手伝いします」

「そういつてもらうとありがたい。で、さっそくだが、明日は月曜日だからパテック社のレピカ社長に連絡をとってもらいたい。そっちの方のアレンジを秋野君に頼んでもいいかな」

「まあ、最初から仕事の話でもないだろう。まず、乾杯といこうか」

そういつて、グラスを挙げたのは今田だった。秋野も素直にグラスを挙げて応じた。大きく頷く木内の顔がキャンドルの火に揺らいだ。しばらく三人は社内の人事など、とりとめもないことを話した。

話の途中で、料理が運ばれてきた。デセボーリヤという玉葱スープが終わり、今度はメインデッシュのエンチラーダスかテーブルに乗った。細かく裂いた牛肉を棒状に巻き、チリソースと粉チーズをたっぷりとかけた重みのある料理だ。少々辛味だが、しつとりと舌に馴染む。

「なるほど、秋野君のいう通りだ。この料理だったらやはりテキーラが合いそう
だ。これはなんといいものかね」

「それはフリホーレスといって、大豆の一種ですが、これまたテキーラと合うん
ですよ。メキシコの連中はフリホーレスがなければテキーラは飲まない」

木内もビールからサウサに切りかえていた。強烈な香りが漂う。一気にグラス
を干したためか、木内は苦しそうに咳き込んだ。フォークとナイフを上手に使い
分け料理を口に運びながら今田がいった。

「さきほどの話のことだが、たぶん、これだけ大量の鋼管を必要とするプロジェ
クトであれば、エネルギー関連のプロジェクトしか考えられない。そのところ
が興味深いんだがね」

「エネルギーに関連した話といえば、最近のことですが、このメキシコに膨大な
油田が発見されたという噂があるんですよ。もつとも信憑性しんぴょうせいにもう一つ疑問のあ
る話ですがね」

「なんだって……？」

二人は思わず顔を見合わせた。意外な話である。

「少なくともこの数カ月間のメキシコ支店からのテレックスや報告書に目を通
してみたが、そんな話は出ていなかった。なぜ、それを本社に報告しておかなか
ったのかね」

今田は渋い表情をつくっていった。非難めいた響きがあった。ここメキシコ・
シテイは空気が薄いせいや酔いが回るのが早いように思える。それもそうだろう。
なにしろ高度は二千メートルを超えている。

「僕もそう判断して、簡単な報告書をつくったのですが、そんなことでいちいち
本社をわざわざわせることはない。そういうことでして……」

「それで船橋支店長が報告書を握りつぶしたということか。それにしても支店長
はいつたい何を考えているのか。せつかくの報告を握りつぶすこともないだろう
に、そうは思わんかね」

木内は吐き出すようにしてそういった。秋野が少し考えてからいった。

「話は簡単です。要するにメキシコは外貨繰りに困っている。それで彼らは石油
発見の噂を流すことで、外資の還流を図ることを思いついたのではないかと。だ
からこれはガセネタだ、それが船橋さんの判断だったと思います」

「というところ……」

そう聞いたのは木内だった。秋野が頷きながらいった。

「目先のきく人間であるならば、石油の話だったら飛びつきますからね。アンジエト口はそれを狙って、油田発見の噂を流したというのではないか。それに石油に関していえば、先行き供給がタイトになるのではないか、という不安感がありますのでね」

酔いのせいか、秋野は雄弁になっていた。現状はともかく、確かに石油の長期見通しに関していえば、悲観的予測をする専門家がいることは事実だった。

それにしても深読み過ぎはしないかと、木内が質問を浴びせた。木内はいくらか興奮気味だった。

「明確にさせなければならぬのは、噂の信憑性を確かめること、第二はその噂の震源地というか、情報の出所をはっきり捕まえることだと思っただがね。そこを確かめるのが大事だと思うよ」

秋野の顔に一瞬戸惑いの表情が浮かんだ。確かに情報の出所は曖昧だった。それが、日本人社会の一部情報通といわれる人びとの間にまことしやかに流れた噂であったとしても、それを確認するのがいわば駐在員の仕事ではないか。いわれればその通りだった。

「僕もそう思う。この鋼管商談とその話が結びつくように思えるんだ」

横あいから今田がいった。

メキシコ支店は支店長の船橋を筆頭に、本社派遣の社員が十三名、それに現地雇いのローカルスタッフ三十数名を合わせた、総勢五十名規模の所帯である。もちろん、この支店はメキシコの法律に基づき設立された現地法人であり形式的には東京本社とは別法人である。

現地法人の会長には現地人を登用していたが、それはほんの名誉職にすぎなかった。だから東京本社ではせいぜいが古参の部長職にすぎない船橋が、代表取締役として支店の経営権を全面的に掌握していた。

メキシコ支店での船橋の経営方針はあくまで守りに徹し、決して冒険を侵さないことを、基本としていた。それに小さな所帯である。こういうところでは支店長の意向が絶対である。木内の海外駐在の体験からいっても、それは容易に想像のできることであった。

「せめて、情報の確認作業程度はやってもらわねば困る。仮に油田が存在することが事実だとすれば、せっかくのビジネスチャンスを自ら放棄したことになるわけだ。それにしてもなぜ握りつぶしたのかね」

そのとき、ラテン音楽を演奏していたバンドが、ステージを終えたようだった。一斉に客たちの拍手が鳴り響いた。ライトが消え、バンドマンたちの姿が闇のなかに消えていった。秋野は木内の質問に^{こた}えていった。

「ご承知かもしれませんが、メキシコ政界は次期大統領の選出を^{めぐ}巡って、大きく揺れている。一年後に控えた選挙では親米派のマリオネスが政権の座を占めるのではないか、というのがもっぱらの評判です。ですから船橋支店長としては事態が落ち着くまで動くべきではない、そう判断したんだろうと思います」

木内は頷きながらいった。

「つまり政治的リスクの大きいメキシコに現状ではコミットできない、そういうことだね」

「その通りです」

秋野はきついサウサを相当量こなしているはずだが、論旨はすっきりと明快だった。現地の新聞情報だけではなく、メキシコの政治動向に関しても相当勉強しているようだ。異常な物価上昇、大量の失業者、それに権力の腐敗、政権をめぐる確執。メキシコは激動していた。それが反体制運動を加速させていた。

それに、と秋野は付け加えた。

「左翼勢力は九月末に大規模なゼネストを準備していることをご承知ですね。ゼネストに入れば、軍隊と労働者や学生たちとが衝突を繰り広げ、首都メキシコ・シティは騒乱状態になることが予想されています。九月に最大の危機がくるのではないか、僕はそう思います」

秋野の話ぶりからみて、メキシコは経済的にも大変な状態にあることは確かなようだった。

「話は変わるけど、最近メヒペトロ内部で激しく人事が動いているようだが、そこらあたりのことは、どう考えたらよいんだろう。つまり民族派が巻き返しに出ているようにも思える」

確かに木内がいう通り、メヒペトロの内部で何かが起こっていた。レピカにしても三年前に起こった事件で、あっさりと首を切られた一人である。そのレピカが

密やかな形で、復活した。今田が興味があるのはそのことだった。

「レピカ総裁は汚職事件の責任をとって辞任したことはご承知ですね。あの事件は民族派にとって重大な打撃だったと思います。しかし、メヒペトロにおけるカルロス・レピカ人脈が根こそぎ肅清されたわけではないし、依然としてカルロス人脈がかなりの勢力を持っています。話は前後しますが、メヒペトロ人脈が復活し始めたのはちょうど一年ほど前からではなかったかと思えます。それはアンジエトロ政権の反米政策と関係があるような気がします」

秋野がいったメヒペトロを舞台とした汚職事件とは、米国政府の高官がマスコミにリークすることから表面化した事件だった。メキシコではアンジエトロ政権発足以後、最大のスキャンダルとして政界を揺り動かしたものだだった。

事件の経過はこうだった。米墨関係の悪化を機に、米系石油開発会社がメキシコから一斉に引き揚げたにもかかわらず、唯一、インデペンデント（非メジャー系）のユニバーサル・リソース社が残留の方針を決めたことが事件の発端であった。

ユニバーサル・リソース社が利権を持っていたオフショアは、石油埋蔵の可能性からいえば、必ずしも一等地ではなかった。残留の方針を決めたのはメジャーが放棄した鉱区をできるだけ安い値段で買いとることに目的があった。このため、同社はメヒペトロに対して猛烈な贈賄工作を行った。そのことが功を奏して、彼らは残留に成功しただけでなく、メジャーが放棄した鉱区さえも確保することができた。

が、メジャーによるいつせい撤退は、メキシコには原油存在の可能性は少ないという公式な理由のほかに、当時強硬な資源政策を打ち出した、メキシコ政府に対する報復の意味があった。だからユニバーサル・リソース社のこうした行為は、米国政府の立場からいえば、明らかに利敵行為に映った。米エネルギー省長官グレースは再三撤退に応じるように説得したが、彼らは拒絶した。それが米国政府の逆鱗に触れたのである。

米国政府は徹底した暴露戦術に出た。グランドマン航空機疑獄に比べれば遠い中南米での事件だったということもあって、日本のマスコミはさほどの反応を示さなかった。これに対して米国のマスコミは異常だった。テレビ、新聞などマスコミ各社はこの事件に格好の獲物とばかりに飛びつき、同社とメヒペトロ幹部と

の黒い癒着ゆせきを激しく攻撃する記事が連日紙面を飾ったものだった。すさまじいキャンペーンだった。

日本企業も当時、メキシコに石油開発プロジェクトを含めて、大きく喰い込んでいただけに、このスキャンダラスな事件にあるいは日本企業も登場するのではないかと戦々恐々としたものである。そのことが微妙に絡み、石油開発から撤収を早める結果をひきおこしたのだ。考えてみれば、あまり気分のいい撤収の仕方ではなかった。その意味でいえば、ユニバーサル・リソーシズ社は格好のスケープゴートではなかったのか、と今田には思えた。

「アメリカが相次いで対メキシコ制裁措置を打ち出したことに刺激され、メキシコでは逆に反米感情が高まった。このため米墨関係は最悪の事態を迎えることになったわけです。現状ではとても両国間の関係修復は困難です」

秋野はたたみかけるような調子でいった。要約していえば、メキシコは政情不安に揺れ、経済再建で頼みとしなければならぬ米国との関係も修復の兆しは見られない、たとえ石油があったとしてもコミットできるような状態にはない、というのがメキシコ支店の最終結論のようだった。

「秋野君がいうように、この話に我われがコミットするにはいくつかの問題があることも事実だ。第一に問題は石油か天然ガスかは知らないが、いずれにしてもその存在が確認されていないこと。第二は、この国のカントリーリスクをどう判断するかという問題。経済的にはめっちゃくちゃ、しかも巨額の対外債務を抱えている。アメリカとの関係が悪いため国際的にも孤立し、さらにいえばゼネスト騒ぎが起こるなど、政情不安に揺れている。まるでいいとこがない、というわけだ」

二人の議論に聞き入っていた今田が、しばらくの沈黙のあとそういった。

「それにアンジェトロ政権は長くとも一年と少しです。だからといってわが社としてですね、たとえば佐藤忠商事のように先物買的にマリオネス派とくっつくようなことも正宣いってしたくない」

秋野のいい方は少しばかり気負い込んでいるように聞こえた。

「なるほど佐藤忠商事がマリオネス派とね、それは充分考えられることだ。そうした動きが出てきたとしても少しも不思議ではない。しかし、商売のやり方としてはあまり感心できない」

別段、驚いた様子はない。ごく当然のことだろうという調子で木内はいった。

佐藤忠商事といえば政治好きな商社として知られており、社長の豊嶋親吾とよしましんごはとくにそうした性癖がある。トップがそうだと、自然に下もそういうことになる。このメキシコでも派手に動き、不評をかったこともある。そうしたいいくつかのエピソードを今田は思い出した。

今田は木内の言葉を受けていった。

「今度の大統領選挙で民族派が勝つか、それとも親米派が勝利をおさめることになるのか、この場合あまり重要なことではないと思う。むしろ問題はこの国の石油資源をいかにして効率的に利用し、この国の経済を援助するのか。それをプランニングするのが我われのビジネスではなかるうか」

中央のステージではちょうど、今度は別なバンドがアメリカンスタイルの音楽演奏を始めようとしているところだった。ラテン系の音楽よりは、この方が人気があるとみえて、待ちかねたように客たちがひととき大きい拍手を送った。

こういう場所は仕事のためというよりは、やはり娯楽が目的である。なにも食事の最中に仕事の話でもなかるうに、この国の連中の考え方からすれば常識を逸したことだと思ふにちがいない。が、仕事好きの三人の話は延々と続きそうだった。今田は「だから」と言葉をつないだ。

「政争が決着するまで待つ、それは一見政治的中立を守るかにみえるかもしれないが、僕は違うと思う。問題はコミットの度合いだろう。それに商売にはタイミングというものがある。その点では、船橋支店長の判断と僕の判断は違っている。待つことによって、この状態が好転するのだったら話は別だがね」

今田のいい方は自分にいい聞かせるようでもあった。ここで今田はいったん言葉を切り、秋野の顔を正面から見すえるようにして、手にしたグラスを口に運んだ。酔いが全身を包みこんだ。

「わかります。僕もそれが仕事をやる上での基本だと思います」

秋野が意外にも率直な態度で応じた。今田は安堵を覚えた。が、やはりこの話に船橋支店長がどういった態度をとるか、今田には不安があった。たぶん、船橋は正面きって反対はすまい。

といって二人の仕事に便宜を与えるようなこともしないだろう。今田の脳裏に船橋の冷たい表情が浮かんだ。そうだとすれば、秋野の立場はこのメキシコ支店のなかで、宙に浮く格好になる。それもサラリーマン社会にあっては仕方のない

ことのように思えた。

「とりあえず、レピカ社長に会って鋼管輸出の話を進めることが先決だ。彼らが何に使うことを考えているのか、たぶん、この商談のなかではつきりするだろうと思う。今からあれこれ考えても仕方がない、明日は月曜日だからまず、レピカ社長に連絡をとって、アポイントを取ってもらいたい」

レストランの内部は先ほどから混雑しはじめていた。時刻はすでに午後十一時半をまわっているというのに、この遊び好きな国民にとっては、これからが本格的な大人の時間ということであろうか。着飾った紳士淑女たちが、思いおもいに食事と音楽を楽しんでいるようだ。

「連絡は私の責任でやっておくことにします」

秋野がそう答えたあとは、とりとめのない雑談になった。サウサはちょうど、二本目の半分を空にしていた。高山都市での酒の酔いは早い。今田は心臓の高鳴りを覚えた。三人はしたたかに酔っていた。

(つづく)

小説国際プラント・ビジネス戦争（三）

青年と老人

日本経済連合会の会長執務室の入口は、その権威を象徴するかのようには、排他的で重厚なつくりだった。廊下には深ぶかとした朱色の絨毯をびっしりと敷きつめてある。会長執務室の前には女性の秘書が坐り、すぐその傍にはガードマンが不審者を誰何するようには身構えていた。

会長秘書室の受付の前にひとりの男が立った。ちようど、午後三時を少しまわった時刻だった。いつもだと千客万来で賑わう会長室だったが、今日はなぜか客足が途絶えていた。珍しいことだ。男の風体は、どこか異国情緒を漂わし、長く外国暮らしをしている人物のようにも見えた。齢かっころは四十少し前といったところだろうか。印象は若々しかった。

「鎌谷長に取り次いで下さい」

男は小川明夫と名乗った。若い女の秘書は小川を丁重に迎えはしたが、鎌谷に取次ぐことには警戒的な様子だった。だいたいが、鎌谷会長を訪ねてくる客といえは、大物政治家や大企業の会長、社長など、世間的にいえはそれなりに名の知れた人たちだった。秘書の若い女はいぶかしげな表情を浮かべた。

事前に約束もとらずにいきなり面会を求めてくることは、鎌谷会長の社会的地位からいっても考えられないことだ。そう秘書が考えたとしても不思議ではない。秘書が慎重になるのも当然だろう。

「失礼でございますが、本日、約束は頂いてまいしょうか」

鎌谷は珍しく執務机に向かって、熱心に決裁書類に目を通していった。客の来訪を告げるブザーが短くなった。ひとことふたこと短いやりとりがあった後に秘書にともなわれ、執務室に小川が姿を現した。



杉田望

「おお、小川明夫君か、ひさしぶりだ。元気だったか」

広い執務室の一隅から、そんな大きな声を出して小川を迎え入れた。鎌谷は財界のドンに登り詰めた男としては、洒脱しゃだつで気さくな人物だ。そのあたりがこの人物の魅力かもしれない、と小川は思う。

「はい、元気しております。鎌谷会長もお元気そうぞ」

鎌谷はあの頃と少しも変わっていない。お世辞ではなく、本当に元気そうぞだ。鎌谷康祐こうすけが経済ミッションをひきいてメキシコを訪問したとき、それが二人の最初の出会いだった。確か十年ほど前のことになる。

そのとき、小川はカルロス大統領の臨時の通訳を務めていた。鎌谷という人物は並はずれて好奇心が旺盛な男である。鎌谷は日本人である小川がどうして大統領の通訳を務めているのか、レセプションの席で無遠慮に聞いた。

小川は東北地方の太平洋岸に位置した寒村に育った。彼の郷里である宮城県は、明治の時代からアメリカの西海岸や中南米に農業労働者を送りこんでいた。小川をメキシコに結びつけることになったのも、そんな故郷の歴史が背景にあったせいかもれない。

小川はラジカルな学生運動の波に巻き込まれ、多感な青春を東京で送った。だが学生運動に挫折した小川は大学を中退、なんのためらいもなくメキシコに渡ることを決心した。白と赤、強烈に輝く太陽と厳しい自然。なにごとにつけても情熱をたぎらせる国民性。それがメキシコを好きになった理由だと、小川はいった。メキシコは大きく飛躍が期待されるこれからの国である、男の夢を体現するには、かつこの国ではないか、と小川は考えた。

メキシコではアルバイトを続けながら、サカテカス総合大学に席をおき、国際経済論を学んだ。生活は苦しかったが、どうにか大学は卒業した。小川は卒業と同時に、現地採用の形で日本物産に入社した。だが、満足できるような環境ではなかった。仕事といえば通訳と雑用だけだった。賃金に不満はなかったが、現地採用の社員は雑役夫ざつえきふ並みの扱いをされた。

「私は野心家なのでしょうか。そんな環境に我慢できなかったのです」

メキシコも基本的には学歴社会である。アメリカの大学で学位をとれば、新しい人生が開けるかもしれない。すでに三十近くになっていたが、小川は意を決して今度は米国のスタンフォード大学に遊学を決めた。わずかだが、学費ぐらいの

預金もできていた。

米国での学生生活は小川の人生を大きく変える契機となった。アメリカでは、才能とそれを生かす努力さえすれば、男の夢が確実に実現できる、それがアメリカの社会であることを嫌いやというほど、思い知らされた。学究の道に足掛りを得たのもそうだが、彼の妻、ジエーナとの出逢いもスタンフォード大学のキャンパスでのことだった。小川はあの頃が、人生で最高の日々であった

スタンフォード大学でも小川は優秀な成績を収めた。専攻したのは中南米史だった。小川の希望を入れて、恩師であるキャロック主任教授はサカテカス大学の助教授に推薦した。小川は第二の故郷であるメキシコに錦を飾った。学問の世界でも小川は次第に頭角をあらわしていた。

それに彼の妻、ジエーナがカルロス大統領の遠縁とあえんにあたったことも、小川のメキシコでの生活を大きく変えることになった。非公式な立場ではあったが、大統領の顧問として政策立案などにも参加できるようになった。鎌谷は小川の話聞き終えて、カルロス大統領との関わりを合点したものだだった。

「そうか、君は若いのにずいぶん苦労したんだね」

レセプションが終わったあと、部屋に呼んで聞いた小川の話に鎌谷は深い感銘を覚えたようだった。日本にはこうしたタイプの青年が少なくなった。小川の生き方にはロマンがあると鎌谷は思った。メキシコに住む青年と財界長老との奇妙な親交はこうして始まった。

その後も鎌谷は政府ミッションをひきい、あるいは経済ミッションの団長として、幾度かメキシコを訪れた。経済界は中国の次はメキシコだと、相変わらずメキシコブームが続いていたからである。すでにカルロスは大統領の職を辞していたけれど、メキシコ政界に隠然たる勢力を有していたこともあって、鎌谷はメキシコを訪れるたびにカルロスに敬訪問していた。そのたびに小川はカルロスの通訳として鎌谷たちの前に姿をみせた。

鎌谷たちにとって、小川はただのメキシコ事情通ではなかった。小川は両国の間に立ち、利害調整に私心を忘れ、協力を惜しまない、またとない協力者だった。

そのことにも鎌谷は好感をもっていた。とくに借款問題しゃくかんで話がこじれたときは、骨身を惜しまず何かと日本側に協力したものだだった。だからこの老人と青年の關係は利害を抜いた淡い友情に似た感情で結ばれていた。

「まあ、そこにかけて下さい。ところで、今日はどんなことで」

鎌谷は快活に笑いながらそういった。

席を勧められた小川は、ソファに腰をおろすと同時に、いきなり本題に入った。なんと忙しい男だ。鎌谷は小川のことを相変わらずだと思った。小川は鎌谷に対し簡潔だが、要領を得た話し方をした。小川の話の聞き終えた鎌谷は、ううむと唸り声を上げた。

鋼管を五十万トン買いつけたい。さらにあるプロジェクトのために、五十億ドルの資金援助をお願いできないか、というのが小川が話した内容だった。鋼管を買うのはパナマに本社をおく『パシフィック・ツール・エネジー・コーポ』という会社だという。

これだけ大きな買物をする相手だ、身元がしっかりしていなければ話に乗れないのは当然である。パナマ第二運河計画が、財界ペーソスのプロジェクトとして具体化に向け動き始めた時期であるだけに、鎌谷自身もパナマの事情についてはそれなりに勉強しているつもりだった。が、鎌谷には「パテック」と略称するこの会社には聞き覚えがなかった。

「かなり大きなプロジェクトだ。この話にはカルロスさんが絡んでいるとみていいんだね。事情を具体的に説明してくれまいか」

「会長がご推察のように、この話はカルロス氏の承認を得て進めているものです。私の立場はカルロスの代理だというふうに考えて頂いて結構です。五十億ドルの借款にメドをつけて帰るのが、今回、日本にまいりました私の任務です。お願いする借款の用途はエネルギー開発事業に投資する資金の一部だ、と理解して頂いて結構です」

小川は前かがみの姿勢で一氣にいった。鎌谷は小川の話の腕組みをしながら聞き入っていた。目はつぶっているが、鎌谷の頭脳は激しく回転しているようだった。やはりエネルギーに関係するプロジェクトだ、と小川がいったことが気になっているらしかった。

「しかし、小川君。これは釈迦に説法ということになるんだろうが、まあ、いわせてもらえば、日本の経済界はメキシコには警戒的なんだ。その理由は君もわかっているはずだ」

「会長がおっしゃるような懸念があることは私もわかっているつもりです。しか

しエネルギー資源がメキシコで新たに発見された、ということであれば評価もちがってくるのではないのでしょうか」

「新しいエネルギー資源というところ……？」

「いろいろと事情がありまして、ここで詳細を申し上げることはご容赦願いたいのですが、米国メジャーがかつて放棄した石油鉞区の一部に大規模な油層とガス層が存在することが、最近になってわかったのです」

「なるほど、五十億ドルはその開発資金というわけだね。だが、どうもメキシコは政治情勢が流動化しているうえに対外関係でいえば、アメリカとの関係がいかに悪い。確かに日本としてエネルギーには魅力はあるが、率直にいつてメキシコに投資することは難しい。そこらあたりのことをどう考えたらよいのか、聞かせてもらいたい」

「わかりました」

と小川は大きく頷いた。さすがに小川はメキシコ政財界に深く喰い込んでいるだけに、内部事情には精通していた。鎌谷は小川の話の腕組みをしながら聞き入っていた。時どき、眉を動かす以外に表情には変化はなかった。

「カルロスから禅譲を受けて誕生したアンジェトロ政権の任期は、あと一年と少しを残すだけです。アンジェトロ大統領自身が後継者を指名するという形をとるのがもつとも穏当なやり方だと思いますが、現実にはそうやれないところに問題の複雑さがあるのです」

第一、後継者を指名する立場にあるアンジェトロ政権は、大統領自身を含めその腐敗ぶりは想像を絶するものだった。これでは、アンジェトロが推薦する大統領を国民が納得して受け入れるはずはない。実際、メキシコでは反政府運動が学生を中心に大きな盛り上がりを見せていた。

第二は、経済の停滞である。石油をあて込んだ工業開発計画が、米系メジャーがいつせいにメキシコから引き揚げたことで、完全に失敗に終わった。そのツケは、膨大な対外債務を残したことで、インフレーションの加速化と失業の増大だった。とくに失業は深刻だった。

「失業率は実に国民の四割近くに速する。当然のことながら民心の動揺は激しい。このため社会不安が日増しに増殖されているのが、メキシコの現状です」

小川のいい方はため息に近いものだった。そのあたりまでは、鎌谷にとつても

常識的な事柄に属する話として知っていた。鎌谷は小川の話に同意するかのよう
に大きく頷いてみせた。小川は続けた。

「そうした政治的動揺を巧みに利用して、暗躍しているのが親米派のマリオネス
です。マリオネス派の背景には米系メジャーの影がちらつき、マリオネス自身が
CIAとの関係が噂されている人物です。彼らは暫定政権の閣僚名簿まで作成し
ているという噂です」

たぶん暫定政権は、これまでの政策を大きく変え、親米的な政策を打ち出し、
それに対応する形でメキシコから撤退していた米系メジャーがいつせいにメキ
シコに戻ってくるというのが、マリオネス派が考えているシナリオではないか、
と小川はつけ加えた。

「アンジェトロ政権はいかにも反米的にすぎる。その政策を改める政権が登場す
るというのだから、それはそれで結構な話ではないか。それに小川君がいう通り
アンジェトロ政権は無能な上に、あまりにもダーティだ。僕の立場からいうのも
なんだが、国民が反アンジェトロに立ち上がるのも当然じゃないかね」

小川はちよつと考え込んだ。「事態は単純ではないのです」と小川は大きくか
ぶりを振りながらいった。

「政党政治が確立していないメキシコでは、こうした政治的抗争はへたをすると
革命騒ぎに発展しかねません。九月にはゼネストが準備されています。ゼネスト
に入ればたぶん首都メキシコ・シティは騒乱状態になるでしょう。騒乱状態を引
き起こすこと、それが米国とマリオネス派の狙いです。この混乱を回避するため
には、まず経済を安定させなければなりません。それが大規模なプロジェクトを起
こす理由でもあるわけです」

「なるほど、話は単純ではないことはわかった。が、簡単にいえば反政府運動を
進めている連中は共産革命を狙っているということだろうに。そのことに関して
アメリカさんが無関心でいるはずもなからう。だとしたら米国は反対に、革命勢
力を鎮圧する側にまわるのではないかね」

鎌谷が驚いたのは、次に出た小川の予想もしない言葉だった。小川は決して誇
張しているふうでもない。そういう性格の男でもないことは鎌谷にしても十分知
りつくしていると思っっている。

「会長、実をいいますと私たちもそのことを分析してみました。ですが、我われ

が得た結論は、どうやら米ソ両国はメキシコ問題では手を握りあって、アンジェトロ政権を潰しにかかっている、これが真相のようです。そこにメキシコの本当の危機があるのです」

米国の膝元に共産革命が起ころうとしているのに、米国はCIAを使ってこれを助けようとしている。鎌谷には考えられないことだった。それでなくともニカラグアやドミニカ、さらにはコロンビアでさえも米ソは角を突き合わせて、激しく争奪戦を演じているのが現実だった。

中東に次いできな臭い戦場の臭いが漂っているのが中南米である。革命騒動を抑える側に立つのが米国であるはずだ、と考えるのが常識である。現在の国際関係の常識から判断しても、米ソが結託してメキシコに介入することなど、とても考えられないことだ。

「だからこそ、メキシコは経済開発を進めるにあたっては、独白の力でやらなければ駄目と思っている。とくに今回のエネルギー開発はメキシコ経済自立化の第一歩になる。我われは率直に言って、米ソ超大国ではなく、第三世界の現状に理解を持つ、日本やヨーロッパの国ぐにプロジェクトの支援を期待しているのです。幸いにしてメキシコには豊富な資源があります。これを利用してまず、輸出振興型の産業を起こし、ついで就業機会を拡大させるため、国内消費の産業を発展させる。地味な方法だが、これが一番確実であると私は考えます。その第一歩が今回のプロジェクトになるわけです」

そこで小川の話はいったん終わった。

さすがに政財界を泳ぎわたっている人物だけに多少のことに驚かない訓練をつんでいる。金を貸す相手としてメキシコを想定した場合、それにしては、小川の話からは少しも悪い材料は出てこなかった。意識して悪い材料だけを並べたたようにも思えた。借金を申し込むのであつたらもう少しましな話し方もあろうに。そう考えると、鎌谷は少しおかしくなつた。

「小川君、ひとつ君に教えておきたいことがあるが、人に借金するときはできるだけいい話を待ってくるものだ。崩壊寸前のアンジェトロ政権に金を注ぎ込めどもいいのかね」

そういうと、鎌谷はひときわ大きい声で笑った。いかにも愉快そうに笑った。しかし、決して目は笑っていないかった。小川はちょっと当惑した顔をつくった。

小川の額にうつすらと、汗がにじんでいた。

「そうでしょうか。確かにあまり歓迎されるような材料はありません。ただ、エネルギー資源は有力な担保になるはずです。このプロジェクトは日本とメキシコが互恵的な関係を形成することを可能にするだろう、と思います。会長、この点はぜひとも理解して頂きたいのです」

日本は対メキシコ関係でいえば、米国に同調する政策をとっていた。つまりアメリカ政府は事実上の対メキシコ経済封鎖政策をとり、日本もまた、それほど露骨ではなかったが、新規の投資が激減しているだけでなく、輸出保険などの運用もカントリーリスクが大きいとして、厳しく規制されていた。

それを承知の上でのことだろうが、なぜカルロスが五十億ドルもの借金を申し入れてきたのか。鎌谷はそのことを考えていた。小川が持ち込んだ話に乗るには、各方面から大きな抵抗が出てくることが予想される。難しい話だ。鎌谷はしばらく考え込んだ。

ただ、一方でエネルギー情勢に関しては不安もあった。現状では石油は余っている。だが、中東情勢は最近、とみに流動化の様相を見せていた。とくにイランのホメイニ師が死んでからは、その傾向が強まっているようだった。あまり樂觀できる情勢にはなかった。

「話はわかった。ただし小川君。鋼管の件はともかく、五十億ドルの借款の話は確約はできない。それが日本のために役立つことかどうかを十分に考えてから判断したい。しばらく時間をくれないか」

「ありがとうございます。それで結構です。それから会長、いま申し上げたこと、エネルギー問題に関しては当分の間内密に取り扱うようお願いできませんか。とくにアメリカ方面には……その配慮をお願いしたいと思います」

「なるほど、アメリカ筋は駄目だということだね………了解した」
鎌谷がそっくり終わったとき、執務機のブザーが軽く鳴った。つぎの来客を知らせるブザーだった。鎌谷はインターホンのプッシュボタンを押しながら小川に向かつていった。

「この話、日管製鉄が前面に出るわけにもいかないから、たぶん、関西商事を通じて進めることになると思う。で、カウンターパートの名前を聞いておかなければならないね。そこに書いておいてくれないか」

それが小川との会談が終わったことを確認する言葉だった。小川はぐつたりくたびれた思いだった。長く、激しい闘いを終えた男のように、会長執務室を出る小川の足取りは、多少もつれぎみであった。

日管製鉄の社長、吉川竜雄よしかわたつおは社内だけでなく、世間的にも生粋の鎌谷派と評判される人物だった。実際、鎌谷康祐の後を継いで、吉川が日管製鉄の社長に就任できたのも、鎌谷の強引な社内工作があつてのことだった。その点に関していえば、吉川は鎌谷に率直に感謝してもいる。

が、社長に就任して三期、六年もたてば、あれこれと細かいことにも口を挟んでくる鎌谷の存在は、吉川にとって誠に憂鬱であつた。吉川の側近たちがそろそろ社長としての独自のカラーを打ち出していくべきだと、あおり立てることも吉川にとって、心理的なプレッシャーになつていた。

吉川は鎌谷から電話を受けたとき、一瞬眉を曇らせた。メキシコ向けに鋼管輸出の話を進めてくれないか、というのが電話の内容だった。今どき、メキシコでもあるまいに、と吉川は思った。いわば日本にとって、メキシコは経済的には魅力の乏しい国になつていいる。昨日の朝刊も、

メキシコはデフォルト（債務不履行）に追い込まれるのではないか、と悲観的なニュースをワシントンからの情報としていつせいに流していたのを吉川は思い出した。

「また、あの人の悪い癖がはしまった」

吉川はまたも憂鬱な気分にはせられた。が、電話の向こう側では、鎌谷はいかにも楽しげにしゃべり続けていた。中国のときもそうだった。あのときのことを思い出すと、吉川は暗い気分には落ち込んでしまひそうだった。

年産六百万トンという巨大な製鉄所計画を、中国の要人との会談であつさり引き受け、北京での記者会見でこの計画は日中双方にとって、いかに有意義な事業であるかを強調してみせた。その拳句に吉川に対して、「あとはよろしく頼むね」という電話一本で押しつけた。この計画はその後、一転二転と難航を続けたが、現在、ようやく軌道に乗りはしめたところだった。途中で計画の責任をとって何人かの役員が辞任に追い込まれたりもした。

「あのときの苦勞を鎌谷は少しもわかっていない」

そう考えると、吉川はいつそう腹だたしくなるのである。今度の場合もそういうことにならなければよいのだが。ともかく、鎌谷の意向というのであれば、無視するわけにもいかないのが、吉川の立場だった。鎌谷の声は相変わらず快活そうだった。

「この話の背景には、どうやらエネルギー問題が絡んでいると、僕はみているのだがね。ただ、相手は問題の多いメキシコだから、この段階でわが社が前面にできるのは避けたい。できたら腰の軽い関西商事あたりに、前哨戦を務めさせたらどうだろう」

いくら日管製鉄の出身だからといって、鎌谷が日管製鉄のことを「わが社」と呼ぶことには、吉川としては抵抗感がある。第一、法律的に言えば鎌谷はいつさこの会社とは関係がないではないか。特別顧問の地位も五年まえに、おりているはずである。それに吉川が気になることは、商社の起用に関してまで細かく口を挟んでいることだ。

「話は確かに、承りました。会長、相手と申しますか、カウンターパートのことですが、どこでしょう。それとこの話はどなたが継いでいるんでしょうか。参考のためにうかがっておきたい」

鎌谷はなにかメモでも探しているような気配だった。受話器からかすかだが書類をめくる音が聞こえてくる。鎌谷の声が少し間をおいてから返ってきた。

「それは大事なことだった。パテック社という会社だ。ええつと、フルネームでいうと『パシフィック・ツール・エネジー・コーポ』というパナマに本籍をおく会社だ。実際に仕事をやっている場所はメキシコ・シティにあるようだね。そのレピカ社長に直接連絡をとれば、わかるようになっているとのことだ。あとでメモを秘書に持たせることにする」

そういい終えると、鎌谷の電話は突然切れた。いったいだれがこの厄介な話を鎌谷に持ち込んだのか。あの狸親父め、質問をはぐらかして電話を切ってしまうわい。どうせ、得体の知れぬやからが、またも鎌谷をたきつけてのことだろう。そう考えると、無性に腹が立った。

「どうも会長は得体の知れぬやからとのつき会が多い」

つぶやくように、吉川はそういつて接客用のソファに身を沈めた。が、吉川のは気分は一向に晴れなかった。鎌谷との電話でのやりとりで、またも自分がこの会

社の実力者ではないことを改めて思い知らされた感じだ。吉川はそばにあったインターホンに向かって、どなるようにいった。

「専務の唐沢君を呼んでくれないか」

まもなく専務の唐沢が大きな図体を揺すりながら社長室のドアを開けた。唐沢は海外営業担当の専務だった。吉川と視線が合った瞬間、無遠慮に手を上げた。立っているだけで、人に威圧感をあたえる男だ。

どこか鈍重である。出た学校は吉川と同じく国立の法学部だが、日管製鉄にはそんな経歴の男はざらにいる。どこといつて取り柄のないやつだ、よくこの男が日管製鉄で専務の地位まで登りつめることができたものだ、吉川はときどき思うことがある。まして生き馬の目を抜くような激しい、輸出営業の世界であるが、一方では油断のならない男だとも吉川は思っている。

「今しがた鎌谷さんから電話があつてね、うちでメキシコ向けの鋼管輸出の話を進めたらどうかということだった。一応、考えてはみると返事はしたのだが、どうもメキシコとあつてはね」

吉川は社長としての威厳を示すかのような口ぶり、そういった。唐沢は巨体を大きく揺すって、足を組んだ。決して、社長としての吉川の尊厳を認める態度ではない。唐沢の細い目は相変わらず眠っているようでもあった。

「社長、また会長から難問を背負いまされましたな。で、社長はその話を引き受けることにしたんですか」

「いや、それで君に相談しようと思つて呼んだんだ。今朝の新聞にも書いてあつたが、メキシコではデフォルト騒ぎだ。とてもまともな商売をできる相手ではない。そこでだ、日管製鉄が前面に出て交渉するわけにはいかない。関西商事あたりの様子をうかがわせてはと、僕は考えているのだが、こういうものか、君の意見を聞きたい」

「それは会長の考えですか。それにしても今どき、鋼管の輸出の話としては大きいですね。おもしろそうじゃありませんか」

唐沢はいとも簡単に答えた。が、吉川の顔は神経を逆撫でされたようにピクリと動いた。関西商事の起用に関しては、確かに鎌谷会長の発案だが、それを見透かしたように断定されたのでは吉川としてもたまらない。なんと無神経な男だと吉川は腹だたしく思った。そうした吉川のことなど、まったく意に介していない

ような態度で、唐沢は言葉を続けた。

「危ない橋を渡るときは、まず商社に渡らせるといふことですな。結構だと思えます。わが社としても窓口としては課長クラスが適任でしょう。さっそく、関西商事の方に手配をさせることにしましょう」

唐沢の目は相変わらず眠ったように動きは少ないが、口からでる言葉はいちいち的を射ていた。吉川はこの男に話したのが失敗だったと思ったが、それでも気を取り直して手にしたメモを意味ありげに覗き込みながらいった。

「ただ、この話を進めてもらう上で注意してもらいたいことがある。正確には掴んでいないが、この背景にはエネルギーに関係した話があるといふことだ。そのためだが、できるだけ内密な形で進めるように、担当者に注意しておいてもらいたい」

なんのことはない、これも鎌谷の受け売りにすぎないのだが、吉川はそう唐沢にいうことで、ようやく社長としての威厳が保てたように思えた。そのとき唐沢専務の細い目が、異様な光をみせた。が、唐沢の表情はまたもとの鈍重な顔に戻っていた。それはまったく一瞬のことだったので、吉川がこの唐沢の表情の変化に気がつくはずもなかった。

「そうするとなんですね、この話は連盟の方に通しておく必要はないといふことですな。社長がそうおっしゃるのならそれでいきましょう。なるほど、メキシコはやりにくいと聞いていたが、その通りだ」

素晴らしい終わると、唐沢は突然声をあげて笑った。吉川にとっては意味不明の笑いだった。が、唐沢の表情はもはや眠たげでさえあった。眠気覚ましの高笑いか、なんとという男だと吉川は思った。

だが、唐沢のいったことを正確に聴けば、重大なことをいつていることに気がつくはずだった。唐沢がいう連盟とは、正式に言えば鉄鋼製品輸出連盟のことで、鉄鋼各社は輸出製品の価格維持のため、地域ごとに細かく各社別の輸出割当秘密協定を結んでいた。だからたいしては、こうした場合でも連盟と協議したうえで対応を決めるのが一般的となっていた。

仮にあとで協定違反が露呈した場合、責任問題に発展しかねない。だから唐沢はその必要があるかどうかを改めて、社長である吉川に聞いているのだ。唐沢の高笑いは、そうした彼の用心深さを薄める効果を持ったようだ。この唐沢の用心

深さを吉川は気がついていない様子だ。

「それは君、相手が日管製鉄を特命してきたのだから、当然、その必要はないと思う。しかも、本件はエネルギー問題が絡んでいる。当分の間は内密な形で話を進めることにしたい。関係者にもその旨を君の方から徹底しておいてほしい」

このときばかりは実に明快に吉川はいい切った。吉川の顔には、そんなことも判断できないのか、とでもいいいたげな表情があった。吉川は鎌谷から電話を受けて以来、すっかり憂鬱であったのが、これでスッキリと晴れる思いだった。

「わかりました。そういうことで関西商事に連絡させることにします」

唐沢はそういうと、しこを踏むような姿勢で大きな体を持ち上げ、社長室を出ていった。吉川は薄笑いを浮かべ、座ったままの姿勢で見送った。これで鎌谷から持ち込まれた難題を唐沢に押しつけることができたとかと思うと愉快でさえあった。吉川は久しぶりに爽快な気分になっていた。

(つづく)